

鳥インフルエンザ——  
新しい展開への考察③

加藤宏光

## 行脚

「大変でしたでしょう」

量販店エーインのチーフバイヤーの星佐は鶏太の目を見ないで、こう答えた。顧客行脚の第一歩で訪れたエーインの本社事務所である。エーインは今回のA1発生で、先ず鶏太のブランドを店頭から外した。

『先ずは、ここで、俺の気持ちを分かって欲しい』

鶏太は、これまでの経過を綿々と語った。相手が先ず自分のブランドを外したのは、顧客の心理を先取りしたものである、と理解したうえで、苦境を知って欲しいとの一念がそうさせた。

「でもね、消費者は同情はしても、それで買っていただける、という行動につながるとは限らないですよ」  
鶏太が、自分のホームページに寄せられる同情のEメールについて語った時に、星佐は答えた。そう言われて、鶏太も気がついた。

「心情的には分かる。しかし、実際にどれだけのリスクが潜んでいるか分からないモノに食指を伸ばすなら、安全性を確信できる商品に手が

## 伸びる」

自分でも同じ境遇なら、そうするかもしれない。そこを乗り越えることが、今回の難関なのだ。

「本日は、とりあえず復帰への第一歩を踏み出しました、というご挨拶に参りました。これから、色々な面で努力を惜しみませんので、今後ともよろしくお願いします」

鶏太は、自分が被害者であること、それだけでは何の武器にもならないことを実感した。漠然と考えていた、自分が被害者であることを武器に、という発想にさらに必要な条件があるのだ。

その日は、鶏太は自宅へ引き帰すことにした。エーインでの会話で、自分自身の考えを再度まとめ直す必要を感じたためである。

『どうすれば、消費者が納得してくれるだろう』

珍しく自分の部屋に閉じこもって、鶏太は星佐の言葉を反芻しながら考える。

「下さいない」

「どれくらい？」

「いつもと同じ」

事務所から聞こえる、子供とヒナ

子の会話を、聞くともなしに聞いていた、鶏太は、ふと気がついた。

「ヒナ子」

「何ですか？」

「今の子は？」

「横丁のコンビニの子供ですよ。知りませんでした？」

「そうだよな！ コンビニの子がタマゴをウチに買いに来るのかい？ 売られたのか？」

鶏太は、それまで気がつかなかったが、コンビニにはタマゴが置いてあるはずだ。どうして買いに来るのだろうか。

ヒナ子は当然のように答えた。

「あそこは、ずっとウチのタマゴを食べて下さってるんですよ。なんでも、ウチのタマゴがおいしいので、それしか食べないのだそうです」

「嘘のようなホントの話があります。採卵養鶏場では普通、タマゴといえは、自家生産のモノを食べます。十五年も前のことです。ある養鶏場が、スクラップ・アンド・ビルドでオープン鶏舎を取り壊し、自動化されたウインドウレス鶏舎を建築しました。初めて大ヒナを導入するまでに半年以上かかりましたから、その

農場長の奥さんは止むなくスーパーへタマゴを買いに行ったのだそうです。そこで、ある生産者のレギュラー卵を買ったところ、その奥さん曰く『あそこのタマゴ、おいしいんですよね！ ウチのは一寸しょっぱいみたい』。生産していても、必ずしも自分のものが最高においしいとは限らない、という当たり前の事実には彼女は驚いていました。自分を知って、他を知ること初めて競争が成立する、という単純なことが最近ようやく知られてきている、この業界ならではの逸話かも知れません』

『自分の店頭にならべるタマゴより、ウチのモノがおいしいと言ってくれる消費者がいる。この消費者のマインドをつかもうとしないから、だめなんだ。俺はひよっとして薬をしようとしていたのかもしれない』  
そう思い返した鶏太は、事務所へ入って、直販用のノートをめくり始めた。鶏太が直接消費者に届けたり、事務所販売していたタマゴは、AIの発生前には二〇〇キロほどにもなっていた。毎日一五トン近くのタマゴを消化することに日夜頭を悩ましていた鶏太にとって二〇〇キロと

いう量は実感として捉えられていなかった。しかし、いつのまにか毎日二〇〇キロものタマゴをヒナ子の笑顔一つで販売していたことに気付かなかった自分に恥ずかしい思いをしながら、鶏太はヒナ子に尋ねた。  
「いつごろから、二〇〇キロも直販できるようになったんかな」  
「そうね！ いつごろかしら…いつの間にか、ですね。」

会話を交わしながら、ノートを繰っていた鶏太の指が止まった。  
「……」

突然、売り上げがゼロになっていた。あの日である。その日から、タマゴのみでなく、すべてのモノの移動が禁止された。直径三〇キロ以内にある鶏太の農場は、全部が対象になった。しかし、現実には、鶏太の農場のみでなく、検疫エリアには一七カ所の採卵農場があり、鶏太の羽数を含めて合計一〇〇万羽余りが対象となっていたのである。同業者は皆、鶏太に強い非難の声を浴びせるでもなく、じっと耐えていた。  
二十日余りの移動禁止の期間を過ぎても、本場は稼働できない。  
全羽数の処分が終わった後に、ウイルスの存在しないことを確認する

作業を進めるうちに、GPの稼働が許可になった。残る二八万羽の生産量に対して、パックの製造が再開できることになった。

このニュースは、大手の新聞やテレビでも紹介された。

「現在は業界の強い働きかけに対応した行政の姿勢の改善により、PCR法によるウイルス検査結果が陰性であれば、稼働再開が許可され、二日程度で再稼働が可能となっていますが、現時点では、移動禁止は疑似を含む対象畜のすべてが処理されて二十八日間が過ぎ、二度の清浄化確認試験でウイルスのいないことが確認されないと、解けませんでした」

## AIフリーの証明

「S先生、タマゴの安全性を確認したいのですが…」

鶏太は家畜保健所を訪ね、S獣医師を相手に熱心に何か頼んでいる。「そうですね！ そういったことは通常の業務にないですよ」  
鶏太は、S獣医師に残った二農場

のタマゴからのAIウイルス分離試験を頼んでいた。もちろん、AI感染を受けていない三農場のタマゴにAIウイルスがあるわけもない。なぜ、無駄な検査を頼むのか。

「おかげさまで、GPの稼働は許可になります。しかし、折角パックしても、製品をはがす先は、不安がってなかなか元通りに流通を引き受けて下さいません。AIフリーであることの証明書があれば、復帰の弾みになると思います」

「そうですね。微妙な仕事ですね。検疫の際にお宅の三農場のAIフリーは確認されているのですから…」  
S獣医師は公的な機関が、特定の生産者の製品のPRに荷担するような業務と受け止められることに躊躇しているのである。

「わかりました。先生のお立場で、病性鑑定の範囲を越える業務は難しいでしょうね。では、持ちこんだサンプルにAIウイルスが含まれてい

るかどうかを確認することは可能でしょうか？」

鶏太は何事かを思いついて尋ねた。

S 獣医師は答えた。

「ものによっては、できるでしょう」

「では、後ほど持ちこみますから、よろしく願います」

鶏太は、改めて頼んだ。

農場へ帰った鶏太は、亮太を呼んだ。

「社長、お呼びですか？」

「ウン。炬燵を買って来てくれないかー」

「炬燵ですか？」

「そうだ。すぐ頼むよ」

亮太は訳も分からず、農場を後にした。鶏太は、すぐに受話器をとって、ダイヤルをプッシュした。

「ハイ。TMハッチャリーです」

鶏太が電話したのは、いつも大ヒナの手配を頼んでいる孵化場である。

「源氏です」

「アア源氏さん。この度は大変でしたネ」

TMハッチャリーを経営する角田大祐はフランクに応じた。

「いやはや、もう、大変を越える大変でした。また、どうにもなりませんヨ」

鶏太も素直に答えた。

「それで……」

角田は無駄のない応対をする。それが、角田の思いやりであり、それが分かる今の鶏太にとっては、返って楽であった。

「無理を承知で、九日ほど孵化の進んだ種卵を一〇〇個ほど分けてもらえませんか？」

単調直入に頼む鶏太に、角田は不審そうに尋ねた。

「何に使われるんですか？」

「実は、この度、GPが稼働できる運びになったのですが、バックをしても、なかなかAIフリーを証明する方法が見つかりません。家畜保健所にもお願いしたのですが、宣伝用のテストをお願いすることは、無理なようです。こちらで、タマゴを接種したサンプルを用意して、そのサンプルについてAI陰性を証明してもらえれば、ということ、何とか種卵を使ってテストをしたい、と思ってるんです」

鶏太は、手短かに自分の考えを伝えた。

TMハッチャリーから得た一〇〇個の種卵をトレイに収めて、三五度Cに設定した炬燵の中に置いた鶏太は、夜を待った。

懐中電灯を使った道具を使って、

種卵内の胎児の位置を確認した鶏太は、三農場の各鶏舎から集めたタマゴをプールしたサンプルを、少量ずつ器用に注射器を使ってタマゴに注射した。

それを興味深く見つめていたヒナ子が尋ねた。

「何をなさってるんですか？」

「胎児を使って、AIウイルスがタマゴにないことを確認するんだ」

「いつそんなテクニクを覚えたの？」

「実は、おれは獣医師になりました。G大の獣医コースへ潜り込んで、当時の学生に色々教えてもらったことがあるのさ。今まで、こんなことは忘れていたが、窮すれば通ず、とはこのことかナ」

数日後、鶏太はこのタマゴから回収した液状サンプルを試験管に詰めて、家畜保健所のS獣医師を訪れた。

サンプルの中にAIウイルスが存在しないことを証明してもらうためである。

今までに例のない病性鑑定に面食らいながら、S獣医師は簡易キットを用いて、AIウイルス否定を証明した。鶏太はようやく残る三農場の鶏に対して、タマゴについてのA

I陰性の証拠を手に入れた。

流通再開

この証明を得て、鶏太はYYグループのオフィスを訪れた。伊藤に会うためである。

「この度、GPを再開することになりました。先日は色々お励まし頂き、本当に元氣付けられました。現在の私の農場やタマゴが安心して消費者の口に届けられることを、形で証明したいと考え、これまでの検査結果をお持ちしました」

YYの応接室で、鶏太は用意したAI陰性の書類を見せながら話し始めた。

「先日、近くのコンビニの娘さんが、私どものタマゴを買いに来てくれました。コンビニにはタマゴが置いてあるのに……！ それを見て、私自身、改めて感じました。私は、親父の時代から味にこだわってタマゴを製造していました」

伊藤は、黙って頷きながら、鶏太の話を促す。

「今回の騒動で、つい初心をどこかに置き忘れていました。もちろん、製品の安全性は最低条件ですが、先

ず、消費者においしい、と評価を頂けることが、復興への第一歩でした」

鶏太の言葉に、伊藤は答えた。

「おいしい、ということはなるほど重要ですが、タマゴの味でそれほど大きな差があるのでしょうか？」

鶏太は、携えたパックと皿を並べた。

「まず、この二種類のタマゴを生で味見してください」

伊藤は、尋ねる。

「どちらがお宅のモノですか？」

「それは、味を比べてみて頂いてから明かしましょう」

促されて、伊藤は二種類を比べた。

「こちらのタマゴのほうが旨い」

鶏太は自信を強く言った。

「今、ご評価頂いたモノが私のタマゴです」

「イヤ、こんなに味が違うものですかー!!」

この簡単な賞味比較の結果、YYへのテスト出荷が決まった。現代の情報網の網目が細かく、伝達の早いことを鶏太は改めて実感した。

数日後には、これまでの取引相手から、徐々に連絡が入り始めたのである。鶏太の父、鶏一郎の職人肌が創り出した、独特の味に対しての流通の評価はかねてから高かったの

ある。

しかし、AIという新しいリスクへの恐怖感から、取引を躊躇していたものであった。鶏太にそれを思い出させてくれたのは、身近にいた、鶏太のタマゴの味を愛してくれる消費者の存在であった。

「埼玉で小規模採卵養鶏を営まれる篠原一郎氏に本年初めてお会いした折に、ご自慢のタマゴを賞味する機会を頂きました。この味は特筆に足るもので、筆者も思わず感嘆の声を上げたものです。」

篠原氏のお話では、そのタマゴは和食に合うように製造されているとのこと、ご自身が「このタマゴは味が濃すぎてケーキには合わない」との評を下されていました。独特の原料を独自の比率で配合され、その味をご自身で検定されて、製品化されているとのことでした。そこには、三十五年を優に超える開発の歴史が鈍く光っている気がしました。たかがタマゴ、されどタマゴを実感したものです」

(株)ビービーキューシー研究所代表  
取締役／農学博士・獣医師)